OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	高等学校歴史教育における史料利用について : 教科間協力と高大連携の視点から
Author(s)	酒井, 一臣
Citation	パブリック・ヒストリー. 2010, 7, p. 105-110
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66482
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Journal of History for the Public (2010) **7**, pp. 105-110 ©2010 Department of Occidental History, Osaka University. ISSN 1348-852x
Using Historical Sources in Highschool Education: In Terms of the Cooperation among Subjects and the Connection between Highschool and University
Kazuomi Sakai

教科研究

高等学校歴史教育における史料利用について

教科間協力と高大連携の視点から

酒井一臣

1　はじめに

研究対象となる時代や地域を問わず、歴史学にとって史料が重要なものであることはあらためて指摘するまでもない。しかし、歴史教育の過程で、学習者に史料とは何か、また、史料の利用方法はどうすべきかを理解させる体系だった方法はないように思われる。筆者自身の経験でも、こうした点は、史料読解の授業や先学の諸研究を読んでいくなかで、何となく理解していくものであった。もちろん、研究者を志せば、いやおうなく大量の史料に触れることになるうえ、何らかの事例に関心をもてば、自ずから史料に親しむようになる。それでも、一般の歴史教育という観点からすれば、学習者にとって史料はなじみにくく、なぜいちいち言及されなければならないのか理解しにくいものではなかろうか。この点は、断片的とはいえ史料を扱うようになる高校の歴史教育でも顕著である。

世界史ではそれほど多くはないが、日本史の場合、教科書には要所ごとに重要史料が掲載されており、くわえて副教材として史料集を用いる場合が多い。ところが、実際の教育現場においては、授業時間の制限や、受験への必要性、また古文読解に困難を伴うことなどから、史料を丹念に読んでその意義を教えることは難しいように思われる。また、学習者にとっては、どうしても重要事項の暗記が最優先されがちであり、歴史に特別な関心をもっている場合を除いて、史料は、学習に深みを与えるものというより、むしろ難解な事項が増えるだけだととらえられているのではないか。

本稿では、筆者が現在常勤講師を勤めている京都市立堀川高等学校での日本史の授業経験にもとづき、史料利用の一例として、2009 年 9 月に行った公開授業の内容を紹介し、その課題を考察したい。(1)

(1) 堀川高校では、教員の授業技術向上のため公開授業期間を設け、学内で授業を公開している。なお、本稿での見解は筆者個人のものであり、堀川高校の教育方針を提示するものではない。なお、公開授業では、堀川高校の伊賀公先生（国語科教諭）、木塚功一先生（地歴公民科教諭）から多大の協力を得た。また、荒瀬克己学校長は、授業内容を論文として公開することを快く承諾してくださった。感謝したい。

2　授業実践例

2009 年 9 月 16 日、堀川高校の 2 年生普通科Ⅱ類の日本史の授業 (受講者数 14 名) で、「教科間連携の試み　日本史と古典のコラボレーション」と題して公開授業を行った。[(2)]

普通科Ⅱ類は、国公立大学への進学を希望する生徒の多いコースであり、2 年生の段階では決定していないが、受講者の過半数は受験で日本史を使用する可能性が高い。カリキュラムでは、日本史選択者は 2 年生から 4 単位で学習を始め、3 年生の 9 月頃までに教科書を一通り終えることを目標としており、他校と比較しても授業進度はかなり早いようである。よって、史料集を購入させ、折にふれて取り上げているとはいえ、生徒にとって史料学習は決して親しみのあるものではないように感じている。

ところで、授業で史料を取り上げてわかってきたことは、生徒が史料を敬遠しがちなのは、もちろん解説が拙速なこともあるが、重要史料とされるものの多数が、生徒にとってはかなり難解な古語で書かれていること、政治制度に関わる事柄が主であって無味乾燥な事例の羅列ととらえられることが多いことも、その理由として挙げられる。こうした問題点を国語科の教諭に話し、国語で用いられる物語などの古典教材を日本史の史料学習として利用できないかということになり、公開授業を実施することになった。国語の教材を利用したのは、たんに政治制度以外の史料を読むというだけでなく、史料は国語の教材にもなることに気づかせ、高校における各教科の相互連関を認識させることにもつながると考えたからである。

具体的には、授業進度との関係上、鎌倉時代の社会を考察する単元の学習で、阿仏尼の『十六夜日記』を用いることにした。『十六夜日記』は、鎌倉時代後期の女流紀行文で、阿仏尼が子息の相続をめぐる訴訟のために京都から鎌倉まで旅した際の記録である。『十六夜日記』は、堀川高校で採択している古典の教科書には掲載されていないが、模擬テスト・入試問題などではよく出題されるようで、日本史では鎌倉文化史のところで重要著作として紹介される。

授業は 2 時間連続であったため、最初の 1 時間は、鎌倉社会の全体像を教科書と教科書準拠の整理プリントに沿って解説し、2 時間目で鎌倉社会の実態をみる目的で『十六夜日記』を紹介した。授業で扱ったのは、冒頭部・駿河路・結尾の長歌である。

生徒には、現代語訳つきの原文と阿仏尼に関する簡潔な説明プリントを用意し、古文の文法的読解が目的ではないことを述べ、現代語訳を同時に読みながら授業を進めた。

『十六夜日記』からは、鎌倉時代の土地制度・訴訟制度・朝幕関係の実態を知ることもできるが、授業で強調したのは、社会史的側面である。例えば、鎌倉時代の旅行はどのようなものであったか、女性が訴訟に出向くということは何を意味しているか、旅行が可能であったということが文化の伝播にどのような影響を与えていたかなどである。

まず、旅程をみることで、現在のように整備されていない道を歩いて旅行したことを再確認させた。当たり前のことと思われるかもしれないが、生徒はあらためて驚いたようだった。頭

(2) 指導案は、稿末につけた付属資料を参照されたい。

ではわかっていても、当時の人々の体験を読むことで、印象をあらたにできることが、史料利用の大事な一面であろう。

続いて、冒頭部を用いて、阿仏尼の子息冷泉為相の相続問題から、当時の土地制度や訴訟制度を再確認したが、こうしたところでは、生徒の反応はあまりよくなく、この点は、結尾の長歌を利用して朝幕関係を考えたときも同様であった。

駿河路の部分では、「富士の山を見れば、煙立たず。昔、父の朝臣に誘はれて … 富士の煙の末も、朝夕たしかに見えしものを」という記述から、富士山が活火山で、阿仏尼の若い頃には噴煙を上げていたことがわかることを指摘した。史料は、政治や経済のことだけでなく、過去の火山活動など地誌をうかがうこともできることに、生徒は関心をもったようだった。(3) このような意義を教えることによって、史料が受験用の退屈で難しいものではなく、様々な情報を読み取れるものであることに気づくきっかけとなればと考えている。

いずれの部分を扱う際にも、こちら側の意図を先に言わず、意見や感想を自由に言わせるようにした。例えば、宇津の山越えで、阿仏尼が出会った知り合いの山伏に手紙を託す場面では、ある生徒から「ちょっとした知り合いに手紙を預けて大丈夫なのだろうか」という感想がでて、それを巡って「郵便制度がないから仕方がない」・「京都の町でわざわざ頼まれた家を探すのだろうか」などと、過去と現在を比較してのいろいろな意見が述べられたのは、思わぬ収穫であった。

まとめとして、国語科教諭から、文学作品としての『十六夜日記』の意味を簡単に説明していただき授業を終えた。

生徒は、とまどったという者が多かったが、一方で、教科書を進んでいくだけでは味わえなかったことに刺激を受けたという意味の感想を述べた者もあった。

3　史料活用の課題

上記の授業の目的は、歴史教育における史料利用の一例という面もあるが、くわえて高校と大学の接続（高大連携）と高校教育における教科間協力をも意識したものであった。

現在、大学入学後、大学になじめず退学・休学する学生が多いが、その理由のひとつに、大学の授業についていけないことが挙げられる。歴史教育に限っていえば、近年の大学では、1年生を対象とした授業で、本格的な史料読解をすることはないだろうが、それでも、多様な見解が紹介され、高校の歴史では扱わなかったような話題が現れることに驚く学生もいよう。それこそが大学教育の魅力だともいえるが、やはり大学教員の考える高校までの教育内容と、現実の高校教育には乖離した面があるのではないだろうか。

その一例が社会史・生活史である。最近では、政治外交史など比較的に社会史と縁のうすい分野であっても、通史的・総合的説明では、時代相の一面として、当該時代の社会や人々の意識・生活に言及することが普通となっている。しかし、高校の教科書では、以前ほどではないにせ

(3) この点に関しては、榎原雅治『中世の東海道をゆく』中公新書、2008 年から多くの示唆を得た。

よ、社会史への言及が少ない。また、人々の意識レベルの議論の場合、解答を限定しにくいという試験技術的な面もあり、入試問題でもあまり触れられない。限られた授業時間で決まった分量を学習させる高校の授業において、政治史が主軸となるのは当然であり、筆者はむしろその方が望ましいと考える。ただし、生活史的な側面は、生徒の興味関心を引き出すのに極めて有効であることも事実である。多くの生徒にとっては、徳川吉宗の行った政治の詳細より、将軍の性や食などの日常生活の方が「おもしろい」のは致し方あるまい。筆者は、授業の流れを阻害しない範囲において、扱う時代に関する社会や生活の実情を紹介するように努めているが、その際に役立つのは、政治史料より文学作品や随想などである。

重要な文学作品や随想は、文化史の単元で紹介されるが、残念ながら作品名の羅列であり、おそらく教科書の最も無味乾燥な部分である。しかし、後世に残った名作群に関心をもたせることは必要であり、その点でいえば、国語の教材と重ねることで、幾分かは生徒の記憶に残すことが可能になる。もちろん、生徒が自発的に、授業などで読んだ部分から、文学的発見や歴史的発見をしてくれるのが理想であるが、それを標準にしてすべての生徒に要求することは困難である。それでも、国語と日本史（この組み合わせは多様である）が同じ教材で論じられることを知るだけでも、教科間に有機的連関をもたせることにつながるものと考えるのである。また、多様な解釈が可能な文学作品などを用いることで、将来の大学における歴史教育入門としても有効であろう。

繰り返しになるが、実際の授業では、こうした試みを行う時間は限られており、生徒の反応もいつもよいわけではない。上記の授業でも、日本史は嫌いではないが古文を読むのは苦手であるという生徒がおり、「いつもより難しく、つまらなかった」という反応が返ってきた。しかし、そうであっても、歴史はたんなる暗記の連続ではなく、解釈は多様であり、過去の人間の営みそのものを学ぶ教科であることを認識させるためには、史料の活用は必要であり、それも様々な分野の史料を紹介することが肝要なのである。

最後に、若干の提案をしておきたい。

日本史の授業では、副教材として史料集を用いるが、数社のものを調べたところ、ほとんど同様の史料を紹介している。各教科書に合わせ、受験に役立たせるためには、必須の史料を掲載せざるを得ないことは理解できる。しかし、それにくわえて、教科書では扱いきれない、もしくは取り上げにくい史料をも掲載してはどうか。

いくつか筆者が実践した例を挙げてみる。豊臣秀吉の書簡は、ほとんど仮名で書かれており、内容そのものより、秀吉が農民からたたき上げで天下人になったことが実感できる。また、近代史では、永井荷風の『断腸亭日乗』から、昭和の東京の世相がうかがえる。副教材は、教科書より編集に裁量の幅があるのだから、定番以外の史料を掲載した個性的な史料集があってもよいのではないだろうか。すなわち、「史料とは何か」だけではなく、「何が史料か」を考えさせる教材も必要であろうということである。

本稿では、日本史が中心となったが、高等学校での歴史教育から史料のかかえる課題を論じた。史料活用を通じて、より豊かな歴史像の提示と、大学教育を視野に入れた教科間協力を考える一助になればと考える。

【付属資料：指導案】

2009 年度 9 月期公開授業「日本史 B」

教科間連携の試み　日本史と古典のコラボレーション

授業者：酒井一臣

○公開授業の概要と目的

言うまでもないが、高校における各教科は総合的に学習することが重要である。疎密の差はあるとはいえ、ある教科で学習した内容は、別の教科の学習を助け、理解を深めることに裨益する。

日本史の場合、史料の学習が不可欠であるが、史料の中には、古典の教材と共通するものも少なくない。日本史に限らず、歴史の学習では史料の利用が重要である。しかし、史料を、入試の準備という意味を越えて、どのように位置づけ、生徒に学習させるかは困難である。日本史の場合、ほとんどの史料は文語であり、生徒が理解しにくく、くわえて、授業進度の関係上、すべての重要史料を丹念に読解する時間をとれないという問題がある。その結果、史料学習の必要性が高いにもかかわらず、授業では未消化のままになる史料が多いという現状である。

今回は、公開授業期間を利用し、史料学習の意義と楽しさを生徒に認識させるため、古典の教材(『十六夜日記』…阿仏尼著。鎌倉後期) を利用し、鎌倉時代の社会史の学習を行う。古典の教材が、日本史の学習にも有益であることを理解させる一方で、逆に、日本史の知識で古典をより深く理解できることに気づかせることが目標である。

なお、公開授業では、国語科の伊賀公先生に、古典学習の視点から自由にご発言いただき、生徒に重層的な視点を提供していきたい。

1. 日　時：　2009 年 9 月 16 日 (水)　1・2 時間目
2. 場　所：　演習室 9
3. 講　座：　2 年 2 組 (普通科Ⅱ類)　日本史講座　14 名
4. 使用教材：　『日本史 B　新訂版』(実教出版)
   『最新日本史図表』2 訂版 (第一学習社)
   空欄補充プリント (通常授業で使用しているもの)
   参考用資料プリント (十六夜日記本文・阿仏尼関連)
5. 単　元：　第 5 章　武家社会の成立と文化の新機運
   第 4 節　鎌倉武士と農村生活
6. 古典教材について：

今回利用する阿仏尼の『十六夜日記』は、鎌倉後期に書かれた女流紀行文である。現在、本校で採択している古典の教科書には採択されていないが、入試や模擬試験で頻出するようである。授業で扱う箇所は以下の 3 箇所である。

・冒頭部 (鎌倉へ訴訟に赴く経緯) → 地頭の問題、訴訟制度の問題

・駿河路 → 共通していた文学知識、富士山の活動の変遷

・結尾の長歌 → 朝廷と鎌倉幕府の関係

7. 観点別評価基準

〔関心・意欲・態度〕　鎌倉時代の社会について、関心を高め、より深く実態を知ろうとしている。

〔思考・判断〕　鎌倉時代の人々の暮らしぶりについて、想像力を働かせて思考している。

〔表現・技能〕　史料から、鎌倉時代の政治・社会の制度を読みとり、自分の判断を適切に発言できる。

〔知識・理解〕　鎌倉時代の社会に対する基礎的な知識を身につけ、当時の人々の意識や現在との比較に思いをはせることで、より豊かな鎌倉時代像の理解に進むことができる。

8. 授業の進行計画

今日の授業の目的

↓

鎌倉時代の社会について（空欄補充プリント）

↓

白地図で東海道を確認（作業）　自由に書かせた後、資料集で確認

↓

『十六夜日記』を読む

↓

それぞれの箇所を読みつつ、先の授業内容との関連を説明

その際、以下の諸点を考えさせる

・鎌倉時代における女性の地位

・鎌倉時代の荘園のありかた

・朝廷と幕府の関係

↓

まとめ